正信偈稽古和讃全

特71
514

正信偈稽古和讃

帰命无量寿如来
南无不可思議光
法藏菩薩因位時
在世自在王佛所

觀見諸佛淨土因
國土人天之善惡
建立无上殊勝願
超發希有大弘誓
五劫思惟之攝受
重誓名聲聞十方
普放无量无邊光
无导无對光炎王

清淨歡喜智慧光
不斷難思无稱光
超日月光照塵刹
一切羣生蒙光照

本願名號正定業
至心信樂願爲因
成等覺證大涅槃
必至滅度願成就

如來所以興出世
唯說彌陀本願海
五濁惡時羣生海
應信如來如實言

能發一念喜愛心
不斷煩惱得涅槃
凡聖逆謗齊廻人
如衆水入海一味

攝取心光常照護
已能雖破无明闇
貪愛瞋僧之雲霧
常覆真實信心天

譬如日光覆雲霧
雲霧之下明无闇
獲信見敬大慶喜
即横超截五惡趣

一切善惡凡夫人
聞信如來弘誓願
佛言廣大勝解者
是人名分陀利華
彌陀佛本願念佛
邪見憍慢惡衆生
信樂受持甚以難
難中之難无過斯

印度西天之論家
中夏日域之高僧
顯大聖興世正意
明如來本誓應機
釋迦如來
楞伽山
爲衆告命
南天竺
龍樹大士
出於世
悉能摧破
有无見

宣說大乘无上法
證歡喜地生安樂
顯示難行陸路苦
信樂易行水道樂

憶念弥陀佛本願
自然即時入必定
唯能常稱如來號
應報大悲弘誓恩

天親菩薩造論說
歸命无碍光如來
依修多羅顯眞實
光闡横超大誓願

廣由本願力廻向
爲度羣生彰一心
歸人功德大寶海
必獲人大會衆數

得至蓮華藏世界
即證眞如法性身
遊煩惱林現神通
人生死園示應化
本師曇鸞梁天子
常向鸞處菩薩禮
三藏流支授淨教
焚燒仙經歸樂邦

天親菩薩論註解

報土因果顕誓願

往還廻向由他力

正定次因唯信心

惑染凡夫信心發

證知生死卽涅槃

必至无量光明土

諸有衆生皆普化

道綽決聖道難證
唯明淨土可通入
萬善自力取勤修
圓滿德號勸專稱
三不三信誨慇懃
像末法滅同悲引
一生造惡値弘誓
至心安養界證妙果

善導獨明佛正意
矜哀定散与逆惡
光明名號顯因緣
開入本願大智海

行者正受金剛心
慶喜一念相應後
与韋提等獲三忍
即證法性之常樂

源信廣開一代教
偏歸安養勸一切
專雜執心判淺深
報化二土正辨立

極重惡人唯稱佛
我亦在彼攝取中
煩惱眼雖不見
大悲无倦常照我

本師源空明佛教
憐愍善惡凡夫人
眞宗教證興片州
選擇本願弘惡世
還來生死輪轉家
決以疑情爲所止
速入寂靜无爲樂
必以信心爲能入

弘經大士宗師等
極濟无邊極濁悪
道俗時衆共同心
唯信斯高僧說

南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏

一弥陀成佛のこのかたい
ーーーーーーーーーーーー
いまホ十劫をへたまへり
ーーーーーーーーーーーー
法身の光輪きわもなく
ーーーーーーーーーーーー
世の盲冥ないてらをすり
ーーーーーーーーーーーー

南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏

智慧の光明えうぶし
有量の諸相ことぐく
光暁かぶらぬものへなし
上 真實明に歸命せよ

重

南无阿弥陀仏引
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏引
南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

解脱の光輪きわもなし

光触かぶるものはみな

有无をはなるとのべまし

上平等覺に帰命せよ

南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏

光雲无导如虚空
一切の有导ふさりぬ
光澤かぶらぬものそなた
難思議城歸命せよ

上

三重

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

南无阿弥陀仏

清淨光明あまねくてらしたまふ
遇斯光の名を聞きて
一切の業繫のぞこりぬ
畢竟依を歸命せよ

下

南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏
南无阿弥陀仏

佛光照耀寂取第一

光炎王佛とおづけたる

三塗の黑闇ひらくなり

大應供救歸命せよ

願以此功德

平等施一切

同發菩提心

往生安樂國

三

道光明朗超絶せり

清淨光佛とまうすなり

ひとたび光照かふるゆゑ

中

業垢をのぞき解脫をう

慈光てるかふるゆゑに

ひろく光いるところにて

法喜とうとぞのべたまふ

中

大安慰城歸命せよ

光明の闇を破らゆく
入ては一切衆生の
智慧光佛とあつけらり
一切諸佛三乘衆
上 とりみ嘆譽きまへり

光明てらしてたくさんだ
入ては一切衆生の
不斷光佛となづけらり
聞光力のゆへをだ
上 心不斷にて往生を

佛光測量ふかきなし
難思光佛となづけたり
諸佛へ往生嘆じて
下弥陀の功徳と稱せむ

神光の離相ととらざれば
无稱光佛と名づけたり
曰光成佛のひろり我だ
中諸佛の嘆ずるところなり

三

光明月日勝過して

超日月光をおびけり

釋迦牟尼ぶつをとうたを

上

无等等すと歸命せよ

弥陀初會の聖衆い

筭數のおよぶことなた

浄土と称ぐんひとみる

下

廣大會哉歸命せよ

安樂无量の大菩薩

一生補處にいたる者り

普賢の德に歸してそ

中

穢國ゆゝしく化するそれ

十方衆生のためにそ

如來の法藏ありてそ

本願弘誓ゝ歸せしむる

大心海に歸命せよ

中

観音勢至もあわれとも
慈光世界を照耀し
有縁我度してきづくも
下
休息あることあらじ

安楽浄土にいるひと
五濁悪世のかへるとて
釋迦牟尼佛のごとくに
下
利益衆生へきいるなり

四神力自在なること
測量するべからざるなり
不思議の德をあらはす
上　无上尊なり歸命せよ

安樂聲聞菩薩衆
人天智慧やうかれ
身相莊嚴みなおなじ
中　他方に順じて名をつゝ

顔容端政たぐひなし
精微妙軀非人天
虛无之身无極體
上平等カと歸命せよ

安樂國ハ称ずひと
正定聚にして住とする
邪定不定聚くふなし
上諸佛讃嘆したまへり

十方諸有の衆生は

阿弥陀至徳の御名をきゝ

真実信心いたりたゞ

上　おもきを所聞と慶喜せん

若不生者のたまひき

信楽まことにたしなり

一念慶喜するひとは

中　往生かならずさだまるなり

安樂佛土の依正は
法藏願力のなせるなり
天上天下にたぐひなし
中大心力我歸命せよ

安樂國土の莊嚴は
釋迦牟尼のみことにて
ぐぐとつたへたまふ
上无稱佛我歸命せよ

已今當の往生を
この土の衆生のこゝろを
十方佛土よりきたる
上
无量无數不可計なり
阿弥陀佛の御名をきゝ
歡喜讃仰せしむまたは
功徳の寶を具足して
下
一念大利・无上なり

たとひ大千世界ふ
みてらん火をもちて
佛の御名を聞きひとん
上ぐく不退のなかるべし

神力无極の阿弥陀い
无量の諸佛をめたまふ
東方恒沙の佛國より
无數の菩薩ゆきたまふ

五十六億七千萬
弥勒菩薩いとしとへん
まことの信心するひとん
このゝひさしをもくべ
念佛往生の願によりて
等正覺にいたるひと
をもいち弥勒ホトケをゞして
大般涅槃をさとるべし

真實信心うるゆへに
そなへち定聚に入ぬべ
補處の弥勒におなじく
无上覺をさとる形り

像法のときの智人も
自力の諸教とおもて
時機相應の法あれい
念佛門にぞうたへ

弥陀の尊號をとなへて、
信樂まことにうるひとん。
憶念の心は称まして、
佛恩報ずるおもひあり

五濁惡世の有情の
選釋本願信ぞそなべ。
不可稱不可説不可思議の
功德へ行者は身ぶみてり

本師龍樹菩薩へ
智度十住毘婆娑等
ばくアておろく西をほめ
さそ〳〵ゑて念佛せしうり

南天竺に比丘あらんに
龍樹菩薩とおぼくび
有无の邪見を破をじと
世尊いう称てとゝまふ

本師龍樹菩薩は
大乗无上の法をとき
觀喜地と證してそ
もろもろ念佛をすゝめる

龍樹大士世にいでゝ
難行易行の道ひらけ
流轉輪廻のこゝろをば
弘誓にあはれのせたまふ

本師龍樹菩薩の
おしへをきうんひと
本願心にうけしめて
ぬ弥陀と稱ぞ

不退ぜくうをみやら
ろんとおもうんひとへ
恭敬の心に執持して
弥陀の名號稱ぞ

南无阿弥陀佛の廻向の

恩徳廣大不思議ふて

往相廻向乃利益にハ

還相廻向ふ廻入せり

往相廻向の大慈ふ

還相廻向ハ大悲ねう

如來乃廻向ふうりせば

淨土の菩提へいくせん

弥陀観音大勢至
大願のふねよ乗てぞ
生死ゆくみちはるけ
有情ぞよそうのせてふ

弥陀大悲の誓願は
こゝ一心ひとへみち
ふく信せんひとへみち
称てもさあてもべだくく
南无阿弥陀佛ととなへ

他力は信心うるひと様
うやまひおそれよろこべ
さとるたちうとぐ親友ぞと
教主世尊いろたまふ

如来大悲の恩徳へ
身は粉にしても報ずべし
師主知識乃恩徳も
骨とくだくとも謝しぬ

改悔文

そろくの雑行雑修自力をすてとふうとて一心に阿弥陀如来我等が今度乃一大事の後生御たすけ候へとたれたてまつりして候

たのむ一念ろくに往生一定御助け治定とぞんじたく乃称名へ御恩報謝とぞんじたく候おの御とよろこびまゐらせ候

さてり聽聞まゐらせ候こと御開山聖人御出世ゝ御恩

次第相兼の善知識のはからひ
ざ尽御勧化御恩ありがたく候
ど候こめくをさざめとうせらる
る御おきて一期殘かぎり
まのりをそうとぐ〳〵候

末代无智の在家止住の男女たらん
ともかゝるこころをひとつにして阿弥陀
佛をまくたのみまいらせて餘のさ
へあるをもうばず一心一向に佛たすけたまへ
まうさんに衆生をもらし罪業ハ深重さう
ともうるまじく弥陀如來ハすくひまいら

べ〻これをまち第十八の念佛往生の誓願
はいろ〻ちりかく〻のごとく決定してはくすん
称てもさへてもいのちのすゑんぐりん
称名念佛をぞ[illegible]めのりおなかをく
それ八万は法藏をまつらつとも後世を

まつ〻ざる人と愚者とをもひ一文不知の
尼入道をもとらんをも後世をまる成智者
をもとらんをまつらんをぞ當流のこゝろへなる
がちつまりをく此聖教をよみのばまつ
たうとらんをも一念の信心をとられをまつ
ざ尽人ぐ〻事あるべ〻をぞ

聖人の御こゝろにも一切男女たゝん身へ
弥陀の本願を信ずべしとあるなり
とゝ申さるゝ
ゆゑ申さるゝ女人おとりたるもとゝろくの
雑行をすて一念弥陀如来今度の
後生たすけたまへとたのゝ申さん

人は十人も百人もみなゝ弥陀の報土
に往生とゝ事さらくくゝうたがひあるべ
からざるものなりとあるかしくく

夫在家ゝ尼女房たゝん身へあるのゆう
もはく一心一向ゝ阿弥陀佛をたのゝ

まいらせて後生たすけたまへと申さん
人とぞおもふ御こゝろざしあるべしとおぼし
とりてきこしめすべきこゝろの心もおもくあるべし
これさるほどに弥陀如來の御ちかひの他力
本願とは申次第このゝちの人々なを後生の
たすけたまへとのこゝろまことありがたき歌

思ひたゞ南无阿弥陀佛くゝ
とるべきたのもしあるべしくゝ

抑男子も女人も罪のおもくふかく
諸佛の悲願をたのゝそもいまは時分に
末代惡世なれば諸佛の御ちかひにて年

かなへざる時あり是ゆへに阿弥陀如來
と申奉るへ諸佛よもぎれて十惡五逆の
罪人とゝれをけんとゝ大願をおこし
ましくゝ阿弥陀佛とあり給へりそれ
佛をゝくたのゝて一念御さすけ候へと申
さん衆生とゝれをけずば正覺をしと

ちゝひまーはをを弥陀るれば我等ぐ極
樂に往生せんとと願ゝぐひあし此
ゆへに一向に阿弥陀如來たゝけ給へ
とゝくゝ心よゝぐひゝく信じて我身の
罪のふゝ事をゝうちゝて佛まうせ
はいゝせて一念の信心さぐまんとも

へ十人へ十人ゐぐゝ百人ゐぐゝみな
淨土へ往生さぐたる事さにうさひあ
こたうくうたうくたうとくおのひたて
らん心のわたらんとおもへ南无阿弥陀佛
くと時ともいたる所ともきゝたる
念佛申べゝこゝとゝるいち佛恩報謝の

念佛と申ゐりあるかゝとゝ

信心獲得さいへ第十八の願とゝるる
ありこの願とおうるとゝ南无阿弥陀佛
のるぐゝとゝるあるこの色へ南无と歸
命する一念ゝとゝなる發願廻向りゝえ

あるべしこれをもて弥陀如來凡夫を
廻向したまふなり
は令諸衆生功德成就とときたまへり
无始以來たゝりどこる惡業煩惱とのて
るところもなく願力不思議とのゝ消
滅するいたるゆゑに正定聚不退の
位をえしめたまふこれまたりて煩惱を斷ぜず
まして涅槃をうるこゝろなし
當流一途の前談なるものなり他流の人に
對してかくのごとく沙汰あるべきなり前
能〳〵ものこゝろをうべきなり

聖人一流の御勸化おりむきは信心成
りて本とせられ候そのゆへはひろく
雜行をなげすて一心に弥陀に歸命を
まゝ不可思議の願力にまかせ佛のう
ち往生は治定せり然たるにそのゝちを
一念發起入正定之聚とも釋せるゆへに
稱名念佛は如來ゝ往生きわまり
御恩報盡の念佛とこゝろうべきなり
あなかしこ〳〵

抑當流の他力信心おりおもむき聽
聞して決定せしむる人ゝ多しかれどもその信心の

通ずるを心底ゝおさめとゝく他宗他人ゞ
對して沙汰すべきに路次大道アれ
くゝ此在所にてもゆくゝ人ゞもたゞくゝすゝ
れを讃嘆さゞるべつたゝ守護地頭方
にむたてあるゝ信心をえさりといて疎畧
乃儀ゆくゝいよゝく公事をまゝくべし文

諸神諸佛菩薩なもろゝ〻ゞ
てきみゝ南无阿弥陀佛の字ばかりに
おもきゝゞゆゝゝゝとゝ外ゝ王法とゝて
おもてゝ内心ゝ他力ゝ信心をたゝくゝ
世間の仁義をゝて本とゝべゝゝ
いち當流ゝさゞむるゝゝの掟のおもむき

ありとこころうべきものなりなをもとく

文明六年二月十七日　書之

抑毎月両度乃寄合の由来あるのなりとていとさきに他のとふあらべ

自身往生極樂乃信心獲得の

こゝをもるゆゑあり古より任古より

ゆまかいるまでも毎月の寄合と

いふことはいづくにもこれあるらいへ

ども　さて不信心の沙汰とかつて

もてこれあることなく近年ばかりも

寄合のとこれなく　凋飯茶飯と

だうりをそむくに退散せりこれハ
佛法ハ本意ハ衆生をすくはんがためなれ次第
ありいなれも不信心の面々ハ一段の不審
をもたて信心ハ有無を沙汰せずハ
さらばかの所詮も彼退散せしむる
法をうべかりしおろかなるべきなく

思案をめぐらしたることなり所詮
自今已後ハ不信の面々ハ
たゞひと信心ハ讃嘆あるべきと所
要那
そもそも當流の安心ハともかくとハ
あるべきなり身の罪障のなれ

とゝのべさせたまふくの雑行のこゝろを
やめて一心に阿弥陀如來に歸命して
今度の一大事は後生たすけたまへと
ふかくたのみ衆生をばたすけたまへ
たまへとこゝろにとゞめおもひとり
こゝろにかけてたのくるひとゝる人へ
まことに百即百生するべきなりこの人
にも毎月の寄合にいつとても報恩
謝德のたゝこゝろにあるべしこれを真實の
信心を具足せしめる行者とも申べ
きなりのちのためにかくのごとし

明應七年二月九五日書之

毎月両度講衆中へ

八十四歳

夫人間の浮生する相をつく〳〵観ずるに
おのゝおそれなりあれのこの世の始中終
はかなきのゝ〳〵なる一期なれば
万歳の人身受けがたしといふ事をきゝず
一生まことやすしいまいくとして
たまゝ百年に形躰たのもしからぬ我や
さる人やさきけふともまたあすとも
きゝ及ばれざる人ゝとのゝ〳〵
まつ露よりもまづしといふべし

朝ゝに紅顔ありて夕ゝに白骨となれり
身なりまで不元常也風きたらぬまべ
さてはいちぶつのまをこたちまち不ごぢ
そもいかなるくだえぬまに紅顔むな
きゝ變じて桃李はるをいたづらにすぎ
ぬるとたい六親眷屬あつまりてなげき

かなしまども更ずその甲斐あるべからず
さてしもいかなる事ぞれかとく野外
ふとろう夜半ばけつとふしてそ
ねもべたゞ白骨のみはれたるばかり
中くとあらはさるべ人間のさとりなる
事ハ老少不定のさとりあれば貴賤の人も

ときやく後生の一大事ばかりを心にかけて阿弥陀佛とふくたのまいらせて念佛
をゝうすべきたりあるべしく

抑當國摂州東成郡生玉の庄内
大坂といふ在所へ往古よりいつあるる

約束のひろけるときやさんかる明應第五の
秋下旬はじめよりかりそめあばらての乃
在所とみてあしきはてにくはせ
一宇の坊舎を建立せしめ當年へいや
さてゝ三年九歳霜をへくりきてを
するのち往昔の宿縁あさうさる因縁

彩うとおぼしくそんへてりぬそれ不しへてこの
在所ホ居住せむる根元いかるべき不一生
涯とおもうやすくすべ榮花榮耀成
ぬべきまま花鳥風月まことうとよべ
あたれ無上菩提のたあ不へ信心決定の
行者も繁昌せしめ念佛とまうさん

とまうすも出來せむる事なりとは
あり一念はまうさとはこのこころ
まさしくさうも世間の人ちえも偏執の
やうもうもむ色に題目ちんとも
出來あうんとえんまみやうふこと在所な
どひて執心のこころをやめて退出すべし

りのちうこれよりていよ〳〵貴賤道俗と
ゆゝしく金剛堅固の信心を決定せしめん
おとまことふ弥陀如來の本願ふかひあるべし
別して聖人の御本意ふたゝねべて
りの欲それふつゝて愚老たゞ当年八
八十四歳まで存命せしる条不思議あり
まゝふ當流法義にもあひかなひ欲れ
あしゞ本望のゝうちふまもべゝぶる
りの欲もれで愚老當年ハ夏ごろより
遠例せしをいまをとしく本復のおぼえ
ゝれ形ばかりハ當年寒中にハかなわべ
往生の本懐ととゞべ条一定とおもひ

なんぞりあんをもくしてこの存命のうちまでも
信心決定いまかしと朝夕ありしはんべるを
まつとふ宿善まことにいとをしく述懐の
こころもつくしもやむことなりこれ
在所ハ三年此居住とうその甲斐も
おりはべりしかばこの一七ケ日
報恩講のくちをふとひて信心決定あるべ
我人一同ハ往生極楽は水意とぞ
たまはりたのもしかるべしこれ
明應七年十月廿一日より記あて
こまかにかくのごとく人に信をとらん
ばかりなり

太子七高僧之御忌日并本願寺御代之御忌日

聖德太子　二月九二日
龍樹菩薩　十月十八日
天親菩薩　三月三日
源空上人　正月廿五日

曇鸞和尚　五月廿六日
道綽禪師　四月廿七日
善導大師　三月廿七日
源信和尚　六月十日

親鸞聖人

二　信如上人　弘長二年十月廿日御入滅満九十歲　正安二年正月四日　六十七歲　壬
三　覚如上人　遊　觀應二年正月九日　遊　八十二歲　壬
四　善如上人　遊　康應元年正月廿日　遊　五十七歲　癸
五　綽如上人　遊　明德四年四月四日　遊　四十四歲　癸

顯如上人　遊　文祿元年十月廿四日　五十七歲　壬
准如上人　遊　寛永七年十月廿日　五十四歲　壬
良如上人　遊　寛文二年九月十日　五十歲　癸
寂如上人　遊　享保十年七月八日　七十歲　癸
任如上人　遊　元文四年八月六日　六十七歲　壬

六　功如上人　遊　永享十年十月四日　六十歲
七　存如上人　遊　長祿元年六月十日　六十歲
八　蓮如上人　遊　明應八年三月廿五日　八十歲
九　實如上人　遊　文龜五年二月二日　六十八歲
十　證如上人　遊　天文十年八月十三日　三十九歲

湛如上人　遊　寛保元年六月八日　二十七歲
法如上人　遊　寛政元年十月廿四日　八十三歲
本如上人　遊　寛政十年六月十四日　五十六歲
文政九年十二月十日

東
教如上人　遊　慶長十九年十月五日　五十七歲
宣如上人　遊　元和元年七月廿五日　五十七歲
琢如上人　遊　寛文二年四月四日　四十歲
常如上人　遊　元祿七年十月廿三日　五十四歲

如上人　遊　元祿十三年四月十日　五十二歲
眞如上人　遊　延享元年十月三日　六十三歲
從如上人　遊　寶暦十年七月十日　四十二歲
乘如上人　遊　寛政四年三月廿日　四十九歲

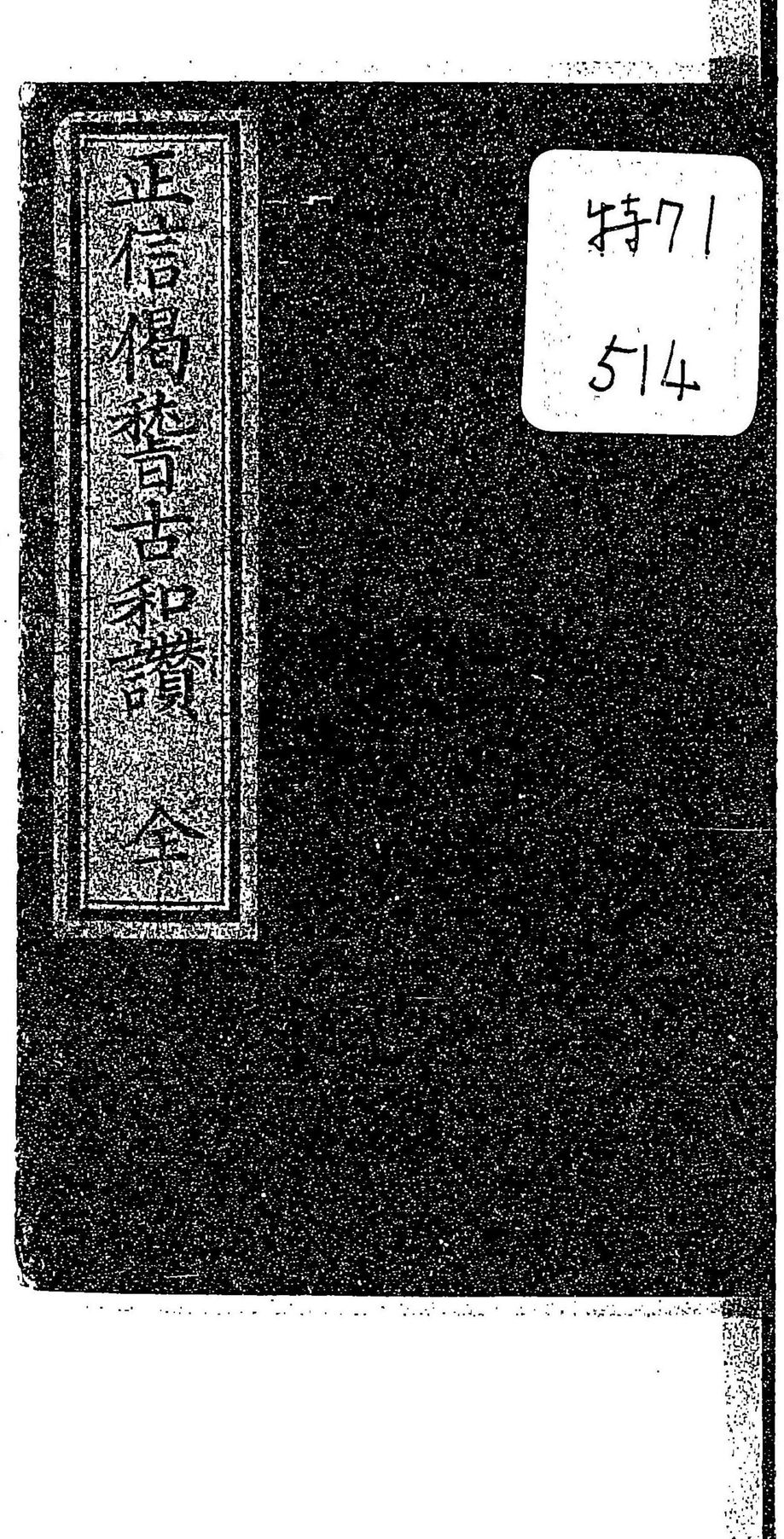
明治廿四年八月十五日印刷
仝　年八月廿四日出版
印刷兼發行者　日本橋区大傳馬町二丁目廿八番地　高木和助

東京

上田屋書店
内藤書店
目黒書店
松村書店
杉本書店
長嶋書店
柏屋書店
伊丹書店

書林

水野書店
小林書店
出雲寺書店
榊原書店
辻岡屋書店
山口屋書店
松盛堂書店
大川屋書店



300941-000-6

特71-514

正信偈稽古和讃

高木　和助／翻

M24. 8

ABA-0040

歸命无量壽如來

南无不可思議光

法藏菩薩曰位時

在世自在王佛所

東京帝國大學圖書之印